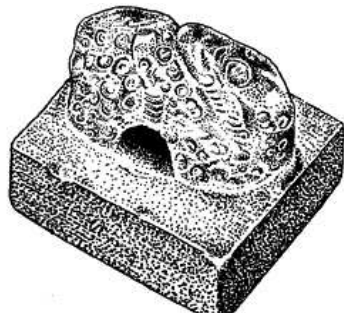


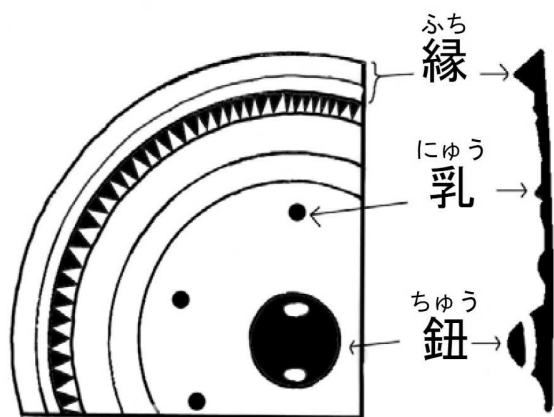
下の絵は、有名な志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印の印影と立体図です。背面に蛇がとぐろを巻いたような細工がしてあり、この部分をつまんで押印します。このつまみの部分を“鈕”と呼びます。その下の絵は、三角縁神獣鏡の一部とその断面を表していますが、中央部分の引っ張りをはり“鈕”と呼び、この“鈕”をつまむことで鏡を片手で持つことができます。“鈕”がなければ、鏡面と背面を挟んで持つか、あるいは薄い側面を両手で支えなければならず、取り扱いが不便になるので、この“鈕”は非常に実用的な役割を持っています。さらに、“鈕”には鏡面に平行に孔が貫通して紐を通すこと



ので、その通した紐を手にも巻き付けたり、棒状のものに括り付けることでしっかり固定することができます。

多鈕鏡はこの“鈕”が二つ以上ある鏡で、その位置も中心からずれたところにあります。多鈕鏡は単鈕鏡から発達したと考えられていますが、これは祭祀に臨む人の装束に掛けるものとして使われたと考えられます。中心に一つの鈕では、人の動作や移動で鏡面が傾いたり回転したりしてしまいますが、二つ

の鈕があれば鏡を装束に安定させられます。



考古学では姿を映す側を鏡面といい、その裏側を背面と呼び、背面に文様が鑄だされていない鏡を素文鏡と呼んでいます。魏志倭人伝には、魏の皇帝が邪馬台国の女王卑弥呼に銅鏡100枚を下賜されたと書かれています。三角縁神獣鏡は、縁の断面部分が三角形になっており、背面の模様「神と獣」が刻まれているという解釈から名付けられた名前です。鏡の大きさは概ね直径が23cm前後で、鏡面がゆるやかな凸面を持っています。大正初め、考古学者の富岡謙蔵氏が、銅の出土地や作成者の出身地等(銘文)から、三角縁神獣鏡を魏の鏡とみなした事で、この鏡が卑弥呼の銅鏡と言われ始めました。

その後小林行雄氏が「同範鏡流通論」を展開し、多くの学者達の賛同、反論の渦が巻き起こりましたが、1962年には森浩一氏が、この鏡は实用性に欠け、鏡を装飾品・祭祀品として扱う国産品に違いなく、呉の工人が日本に来て制作したと言う説を発表し、論争の余波が続いています。

漢代には、前漢・後漢400年を通じて、各時代の思想を反映した新しい鏡が創出され続けました。特定の図像を指標とした鏡式の型式変遷を基礎としつつ、鏡式を越えて共有される要素によって様式段階が7期に区分されています。弥生時代中期後半から後期後半まで、漢鏡3期から6期の鏡が流入する段階においては、鏡保有の中心地は北部九州にありましたが、古墳時代前期に三国西晋鏡が流入する段階には、鏡保有の中心地は近畿地方へと移動しています。岡村秀典氏は、この魏代の鏡の分布域が九州から畿内に移動していることに注目して、鏡の入手主体が九州から畿内に移ったと主張しています。

畿内を中心とするヤマト王権が古墳の築造を通して各地域の首長と関係を結んでいく、と言うような古代史観の中でも、鏡は非常に重要な遺物として考えられています。鏡には、倭人社会に登場した当初から「威信財」という不変の評価があるように思われています。そこには後に成立する三種の神器の概念との混同があるのではないのでしょうか。

岡村氏を始めとする多くの人たちは、外部より入手した鏡という器物を分配する論理には、同時代の社会形態が反映されていて、分布の中心に分配システムを運営した中枢があり、鏡の「分配システム」の変容は、社会の統合原理の変革を示しているとして、中国王朝との直接比較で倭人社会の鏡文化が語られます。しかし、九州島最初の鏡文化の源であった朝鮮半島の鏡文化の変遷を抜きにしてよいのでしょうか。

列島では4000面以上の銅鏡が出土しているのに、韓国では700面くらいしか確認されておらず、鏡の文化は日本列島ほどには普及していません。また韓国では、国家的祭祀を担う場合に威信財と言われ、上流階層においては威勢品と言われています。朝鮮半島の諸集団と倭人社会の鏡の文化を、従来とは異なる視角で比較検討し、そのなかから倭人社会における三角縁神獣鏡を始めとする鏡文化の実態を描き出すことで、「朝鮮半島諸国を介して多くの渡来系文物が倭人社会に伝わり、鏡は倭王権と中国王朝との直接交渉で入手した」という解釈の正否を検証することにもつながると考えられます。